

## はじめに

どちらかといえば頭部に比してからだは小さい、頭を丸がりにして顔は蒼い、さらしの単衣ひとえに黒い麻そうちくの僧服をつけ、厚齒こうしに木綿鼻緒ぼんじゆの下駄をはいたしごく質素な風采である。しかし、そのひきしめられた唇、けいけいたる眸まなこには古武士のような内面のきびしさがあふれている。これが、沢柳政太郎さわやなぎまさたろう氏をして「政治家となったら天下の権をにぎったであろう、財界にでたなら、世界の富をあつめたであろう、学者として身をたてたなら、古今東西の思想を空しゅうしたのであるように」と嘆かした清沢満之の肖像である。

彼はまれにみる天分を東本願寺のために捧げつくした。彼は維新後のわが国における、むしろ世界的ともいふべき深い思想と、広い視野をもちながら、必ずしも彼を用いたわけでもない教団のために精魂を注いで、年齢わずか四十一歳の短命で終わった。しかも、こころざしむなく、晩年にはすべでの事業が挫折し、そのあいだには夫人をうしない、最愛の子に先だたれ、身は結核におかされるといふさんたんたる有様であった。

しかし、この中であって、なおかつ法を求め仏道に生きんがため、その節をまげず遂に他力の信念

の実践に生き切った。彼こそは、近代における真の独立自由の人であつたといふことができよう。「今や仏陀は、更に大なる難事を示して、益々佳境に進入せしめたまふがごとし、豈に感謝せざるを得むや」と苦境の底で彼をしていわしめたものこそ、彼の生涯をつらぬいて流れる純粹性そのものといふべきであらう。彼逝いて六十年、今なおそれは暗夜の灯台のごとく、われわれの行く手を照らしつつある。

今日、彼が生涯を捧げた教団が「真宗同朋会」の名のもとに、ようやく真の教法社会をめざして胎動を始めつつある時、たまたま、彼の生誕百年を迎えたことは、まことに意義深いものがある。

このたび彼の生誕百年を記念して、ラジオ放送がなされるにあたり、彼の思想信仰がやさしく、かつ端的に窺えるもの四編を選び出し、その手引きとした。ひろく各位の御味読を得たい。

昭和三十八年一月一日

東本願寺 教学部長 加 来 玄 雄

も く じ

はじめに	5
他力の救済	7
絶対他力の大道	15
精神主義	20
我が信念	30
略年譜	30

凡例

◇本文は、暁烏敏・西村見暁編『清沢満之全集』（法蔵館）所収のものによりました。できるだけ原文の語勢を損なわないように、仮名づかいは旧仮名づかいのままにしました。ただし、振り仮名をつけ、漢字は新字体を用いました。また、読者の便を考慮し、ルビを付しました。

◇本書は、できるだけ本文に添って、その真意を理解していただくように、本文の書かれた当時の状況の簡単な解説と仏教用語・難解な言葉の註解をつけました。

他力の救済

我、他力の救済を念ずるときは、我が世に処するの道開け、我、他力の救済を忘るるときは、我が世に処するの道閉づ。

我、他力の救済を念ずるときは、我、物欲の為に迷はさるゝこと少く、我、他力の救済を忘るるときは、我、物欲の為に迷はさるゝこと多し。

我、他力の救済を念ずるときは、我が処するところに光明照し、我、他力の救済を忘るるときは、我が処するところに黒闇覆ふ。

嗚呼、他力救済の念は、能く我をして迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟達安楽の浄土に入らしむるが如し。我は実に此の念によりて、現に救済されつゝあるを感ず。若し世に他力救済の教なかりせば、我は終に迷乱と悶絶とを免れざりしなるべし。然るに今や濁浪滔々の闇黒世裡に在りて、



⑬ 夙に清風掃々の光明海中に遊ぶを得るもの、其の<sup>⑭</sup>大恩高德豈に<sup>⑮</sup>区々たる感謝嘆美の及ぶ所ならんや。

### 〈解説〉

「他力の救済」は一九〇三（明治三十

六）年四月、東京で開かれた親鸞聖人御誕生会の祝辞として執筆されたもの。同年六月、『精神界』に発表された。当時、満之は三河大浜の自坊西方寺にあって、

死期の迫った身を療養生活におきながら、一切の世間的仕事から離れて修道に不断の精進を続けた。このような境遇の中から、この文の外に「咯血したる肺病人に与ふる書」「眞の朋友」などを書いてい

る。

① 他力 人間のはからいを超えた力。すなわち阿弥陀仏の本願力である。

満之は「天命に安んじて人事を尽す」（転迷開悟録・全集七五頁）と言

い、「彼に在るものに対しては、唯だ他力を信すべきのみ。我に在るものに対しては、専ら自力を用うべきなり。而も此の自力も亦た他力の賦与に出づるものなり。」（臘扇記・全集七三頁）

もにさとれる世界。人間が必ず帰るべき本来の世界であり眞実の世界である。

娑婆に対する言葉。

⑨ 迷乱 自分の妄分別によって心が乱れ狂うこと。

⑩ 悶絶 苦しみの極。悶え気絶すること。

⑪ 濁浪滔々 洪水で水があふれ荒れるすがた。

⑫ 闇黒世裡 くらやみの世の中。執着とすさまじい欲望の流れで、目の見えなくなった世界をたとえる。

⑬ 夙に すみやかに。すでに。

⑭ 清風掃々 迷倒苦悶の心が吹き払われ

た心境をあらわす。

⑮ 光明海 光明は智慧のかたち。海は迷を転じ、さとりを開く徳をあらわす。

⑯ 区々たる感謝嘆美 人間が言葉であらわす感謝や賞讃。

## 絶対他力の大道

自己とは他なし、<sup>①</sup>絶対無限の妙用に乗託して<sup>②</sup>任運に<sup>③</sup>法爾に、<sup>④</sup>此の現前の境遇に<sup>⑤</sup>落在せるもの、<sup>⑥</sup>即ち是なり。

只だ夫れ絶対無限に乗託す。故に<sup>⑦</sup>死生の事、亦た憂ふるに足らず。死生尚ほ且つ憂ふるに足らず、如何に<sup>⑧</sup>沉んや之より而下なる事項に<sup>⑨</sup>於いてをや。追放可なり。獄牢甘んずべし。誹謗擯斥許<sup>⑩</sup>多の<sup>⑪</sup>凌辱豈に意に介すべきものあらんや。我等は寧ろ、只管絶対無限の我等に賦与せるものを<sup>⑫</sup>樂しまんかな。